

大汶口遺跡墓制考：階層的変異を中心として

渡辺，芳郎

<https://doi.org/10.15017/1955685>

出版情報：史淵. 129, pp.1-46, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

大汶口遺跡墓制考

— 階層的変異を中心として —

渡 辺 芳 郎

〈目 次〉

序

1 問題の所在

2 方法

3 資料

4 分析

5 検討

結語

序

本稿では、中国新石器時代の墓地資料におけるさまざまな要素の変異のうち、階層的な変異を中心に取り上げ、墓地における階層性を検討する。まず階層性把握の方法について整理・検討したのち、本稿で用いる方法を提示する。次に、山東省泰安県・寧陽県に所在する大汶口遺跡の墓地資料を素材として、当墓地における階層性を具体的に分析する。そしていくつかの仮定を設け、階層性の意味を検討する。

1 問題の所在

中国新石器時代の墓地における階層性の問題は、階級社会・国家の形成という問題と関連づけられ、活発に議論されているテーマのひとつである。墓地資

料における変異と社会構造との関係については、意見が分かれるが、⁽²⁾筆者の視座は第5章で述べることとし、本章では階層性把握の方法に焦点をしばって議論を進める。

中国において現在用いられている、墓地における階層性把握の方法には、次のふたつの方法があると考ええる。

ひとつは、ある墓地において、「大型墓」と「小型墓」が存在し、両者の差異の大きさを示すことによって、階層性の存在を主張するものである（例えば王錫平 1986）。後述するように、この変異幅の大きさは、階層性の程度を評価するさい、基準のひとつとして本稿においても採用するが、この方法だけでは、「大型墓」と「小型墓」の間に存在する変異、つまり、階層性「内部」の具体的な様相を把握できないという問題点を持つ。

もうひとつの方法は、ある墓地資料を「大型墓」「中型墓」「小型墓」と、一系列的に分類し、墓地構成要素の階層性—大小・多寡・優劣など—が、それぞれの分類単位に相関することを示す方法である（例えば高焯他 1983・高広仁 1989）。⁽³⁾筆者はこの方法について、少なくともふたつの問題点があると考ええる。

(1) たしかに、墓地構成要素の階層の変異が明確に相関し、大・中・小型墓に分類可能な墓地資料は存在する。⁽⁴⁾しかし、以下で検討するように、墓地構成要素の階層の変異が相関せず、むしろ排他的に近い関係で共存する場合がある。また、複数系列の階層性（後述）が、一系列的なそれに集約していく過程を想定する場合、階層の変異間の相関の程度は、階層性の程度を評価し、一系列の階層性形成の動態を把握するうえで、重要な手掛かりとなると考える。以上の点において、上記の一系列的な階層性把握では検討できないと考える。

(2) もうひとつ問題となるのは、墓地構成要素の階層の変異には、不連続な場合と連続的な場合とがある点である。この連続・不連続という問題は、階層性の程度を評価するうえで重要な指標となると考える。この点において、当初より不連続性を前提とした上記の分類では、階層性把握とその変化の動態を理解するうえでは十分ではないと考える。

つまり、この方法は、ある程度階層性の程度が高まり、階層の変異間に明確な相関関係および不連続性が認められる墓地資料には有効であるが、その形成過程を検討するには十分でないと考える。

以上まとめると、現在の墓地における階層性把握の方法は、

- (1) 階層性における連続性と不連続性
- (2) 階層化要素間の相関関係
- (3) (1)(2)を手掛かりとした階層性の程度の評価とその動的把握という点を理解するうえで、必ずしも十分とはいいがたいと考える。次章において、上記3点を理解するための筆者の方法を提示する。

2 方法

筆者はかつて、考古学的な墓地資料を構成する要素を下記のように分類・整理した(渡辺 1987・1989b)。

- (1) 被葬者の要素：性・年齢・健康状態・人為的加工・遺伝的形質など
- (2) 埋葬状態の要素：埋葬態位・頭位方向・二次処理・一単位の埋葬遺骸数など
- (3) 埋葬施設の要素：地下施設・地上施設など
- (4) 付加物の要素：衣装・装身具・副葬品・供献遺物、遺構など
- (5) 墓地の要素：数量・分布の疎密・他の遺物、遺構との位置関係・立地など

これは現象的な分類であり、本稿の議論に適した形で再構成する必要がある。まず、上記の各要素を、生者が葬送行為の際になんらかの判断に基づいて表現したと仮定する「表現要素」と、生者が表現したのではない、あるいは表現しえない「非表現要素」に分類する(渡辺 1989b)。

一方、これらの要素は、その形態・質・数量・規模などにおいて、なんらかの変異を持っており、その変異を、我々は傾向として、あるいは分類単位として把握できる。そのなかで、大小・多寡・優劣によって、上下関係としての階層性を認識できるものがある。これらの要素を「階層化要素」と呼ぶ。階層化

要素には、数量によって把握できる「数量的階層性」と、質の優劣による「質的階層性」とがある。また、変異を持ち分類可能であっても、階層性を認識しえない要素を「非階層化要素」と呼ぶ（表1）。⁽⁵⁾

表1 墓地構成要素の再分類

	非表現要素	表現要素
非階層化要素	<ul style="list-style-type: none"> ・性 ・年齢 ・人為的加工 ・遺伝的形質 ∴ 	<ul style="list-style-type: none"> ・埋葬態位 ・頭位 ・二次処理の有無 ・一単位の埋葬遺骸数 ・墓の分布 ・立地 ・他の遺構との位置関係 ∴
階層化要素	<ul style="list-style-type: none"> ・健康状態 ∴ 	<ul style="list-style-type: none"> ・墓坑の規模 ・墓坑の形態 ・地下施設 ・地上施設 ・副葬品 ∴

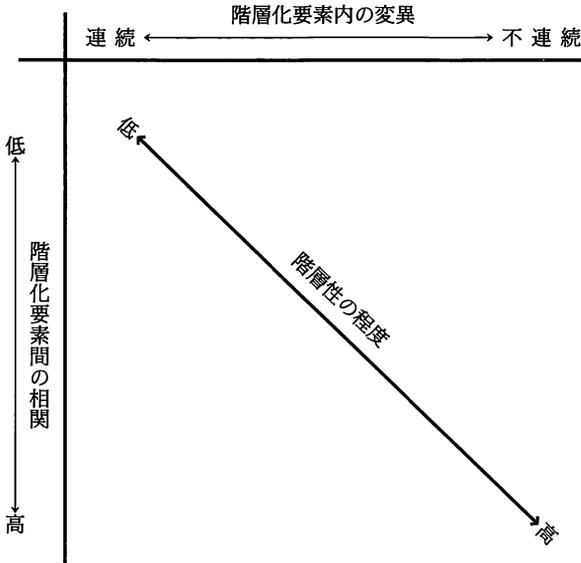
我々は、階層化要素間の、あるいは他の要素との相関関係を検討することによって、墓地における階層性を認識するのである。

次に、墓地における階層性の程度を評価するうえで、本稿では前述の（1）階層化要素内の連続性と不連続性、（2）階層化要素間の相関関係、というふたつの基準を採用する。

（1）の点では、筆者は連続的な階層的変異よりも、不連続なそれを「階層性の程度が高い」と評価する。さらに変異間の距離が大きいほど、やはり階層性の程度が高いと評価する。⁽⁶⁾

（2）の点では、階層化要素内における階層的変異のうち、上位と判断する変異同士がひとつの墓において共存する場合を「相関する」とし、多くの墓においてより多くの上位の変異が共存する場合を「相関が高い」と呼ぶ。そして、相関が高いほど階層性の程度が高いと評価する（表2）。

表2 階層性の程度(模式)



ところで、筆者は「墓制」を「墓地構成要素間の関係のあり方」と概念規定する(渡辺 1987・1989b)。それゆえ、階層性も、階層化要素間の相関関係と規定する以上、墓制の一部と位置づけることができる。また、第5章で改めて詳述するが、筆者は墓制の背後になんらかの社会的規範の存在を仮定する。ただし、社会的規範と認めるためには、ある要素間の関係が多出し、数量的傾向性がなければならないと考える。

上記の概念規定および仮定による場合、少なくともふたつの資料的条件が必要である。

ひとつは、分析の対象とする資料数の問題である。資料数が数基では、要素間の関係に数量的傾向性を認めることが困難である。この点において、大汶口遺跡は十分であると考ええる。

もうひとつは、墓地構成要素内においてある程度変異の幅がなければならないことである。斉一性の高い要素は、その斉一性の高さそれ自体に強い社会的規範の存在を想定することができるが、他の要素との関係は検討できない。た

とえ斉一性からはずれる少数例において、他の要素との関係が認められたとしても、それが社会的規範として成立していたかどうかは判断できない。大汶口遺跡の場合にも、斉一性の高い要素がいくつかあり、それらは、本稿では分析の対象から除外せざるを得ない。

最後に、時期区分と階層性の程度の評価の問題に触れておきたい。後述するように、本稿では大汶口遺跡の時期細分案として、報告書の3期編年案を採用するが、そのほかに4期・5期編年案が提示されている。しかし、いずれの編年案においても、それぞれの時期が一定の時間幅を持つことは否定できない。また、各時期が同じ時間幅を持つ保証もない。それゆえ、例えばある時期において複数系列の階層性が「存在」するということは、その時期内における時間的変化の可能性を残すため、必ずしも「共存」するということの意味しない。ただし、複数の時期を通じて、同一の複数系列の階層性が存在する場合、ある一定期間それらが共存していた可能性が高いと判断する。つまり、本稿での階層性の程度の評価は、ある時期における絶対的・定量的なものではなく、あくまで各時期間の比較に基づいた相対的なものにならざるを得ないことを明記しておきたい。

3 資料

本章では、まず、分析の対象とする大汶口遺跡の全体について概述し、本稿で採用する編年案について述べる。次に、前章で再構成した分類に従って、各墓地構成要素内の変異を分類・整理し、分析の対象とする要素を抽出する。

(1) 大汶口遺跡の概要

大汶口遺跡は、山東省の西部、泰安県と寧陽県の県境に位置する。魯西平原の東端、泰山南麓の微高地上に立地し、県境である大汶河が遺跡を南北に分断している。

遺跡は、1959年5月に鉄道修復のさい発見され、同年6～8月に山東省文物管理处と済南市博物館によって発掘調査された。発掘地点は大汶河南岸の寧陽県堡頭村で、発掘面積は5400㎡におよぶ。調査の結果、南北方向約100mに広が

る墓地133基と、陶窯跡1基、多数の灰坑が検出された。調査成果は1959年に概報が出されたのち(楊 1959)、1974年に正式報告された(山東省文物管理处・済南市博物館 1974)。

1974年、山東省博物館によって第2次発掘調査が行われ、さらに古い墓地と包含層が確認された(山東省博物館 1980)。しかしその調査成果はいまだ十分報告されておらず、本稿では、1959年の調査成果を中心に検討していきたい。

報告では、副葬品の形態・セット関係・切り合い関係より、墓地を前・中・後期の3期に細分している。前期墓は、脚部に多くの縷孔を施す豆、脚部の発達した鼎、ずんぐりとした背壺の副葬に特徴づけられる。計74基を数える。後期墓は、平底の罐形鼎、空足の鬻、肩部が張り一側面が平坦な背壺などを副葬するもので、25基ある。中期墓の副葬品は、前・後期の過度的要素を持ち、19基を数える。このほか、副葬土器を伴わないため、時期不明の墓15基がある。

ところで、大汶口遺跡の編年案に関しては、報告書の3期編年案のほかに、4期編年案・5期編年案がある。

5期編年案は、1974年の調査成果を取り込んだ11期編年案(山東省博物館1980)の5期～9期にあたるが、その内容は十分公表されておらず、墓の所属時期が不明のため、本稿では用いることはできない。また嚴文明氏の4期編年案(嚴 1980)は、大汶口文化全体を8期に編年するさい、報告による後期墓を7・8期の2期に細分している。ただし、やはり各墓の所属時期は示されていない。王錫平氏(王錫平 1986)は、4期に分け、各時期の墓をすべて列挙しているが、逆に、各時期の細分基準を示しておらず、残念ながら現在のところ、やや説得力を欠く。

以上のように、4期・5期編年案は、現在のところ採用するには十分とはいええず、本稿では、細分基準が示され、各時期の内容がわかる、報告書の3期編年案を採用する。

(2) 大汶口遺跡の墓地構成要素

① 非表現・非階層化要素

被葬者の性別の同定率は低い。34基39体(25.6%)が鑑定され、単人墓30基

では、男性墓14基、女性墓16基が、男女合葬墓では3基が、男女と小児の3人合葬墓では1基が、それぞれ同定されているにとどまる。

被葬者の年齢については、「成年」「未成年」「児童」「不明」の4者に分類されている。本遺跡では、ほとんどが成年(85.8%)であり、未成年・児童は7.8%にとどまる。成年内部での細かな年齢の同定はされていない。

被葬者の遺伝的形質に関する報告はない。

被葬者に対する人為的⁽⁷⁾加工については、顔聞氏の研究成果があり(顔1972)、2 I²型(上顎骨の両側門歯)の抜歯例と、後頭部に顕著な頭骨変形とが確認されているが、どの墓の人骨か示されていないため、本稿では使用できない。

② 非表現・階層化要素

被葬者の健康状態に関する報告はない。⁽⁸⁾

③ 表現・非階層化要素

埋葬態位は、仰臥伸展114基、側臥12基、俯身・屈肢各1基と、高い斉一性を示す。⁽⁹⁾頭位方向も斉一性が高く、128号墓(北向)・45号墓(西向)の2基を除いて、80~120度の東向である。

二次葬は確認されていない。

一単位の埋葬遺骸数は、単人120基、2人合葬7基、3人合葬1基である。2人合葬のうち、男女合葬が3基、不明4基で、いずれも成人である。3人合葬は先述したように、成人男女と性別不明の児童よりなる。また、遺骸が検出されない「空墓」5基がある。

墓の分布は、前・中・後期を通じて、ほぼ満遍なく南北に分布するが、各時期ごとに、墓同士の遠近からいくつかの墓群を設定する(図1)。前期墓では、A~F群の6群に分類する。東西に点在する墓は墓群に含めない。中期墓はG~H群の3群に、後期墓はJ~O群の6群にそれぞれ分ける。

立地は現在微高地上にあるが、墓地造営当時の立地は不明である。

他の遺構としては灰坑と陶窯跡がある。前者については詳細不明である。陶窯跡は墓地のほぼ中央に位置し、後期3号墓に切られている。また、窯算上よ

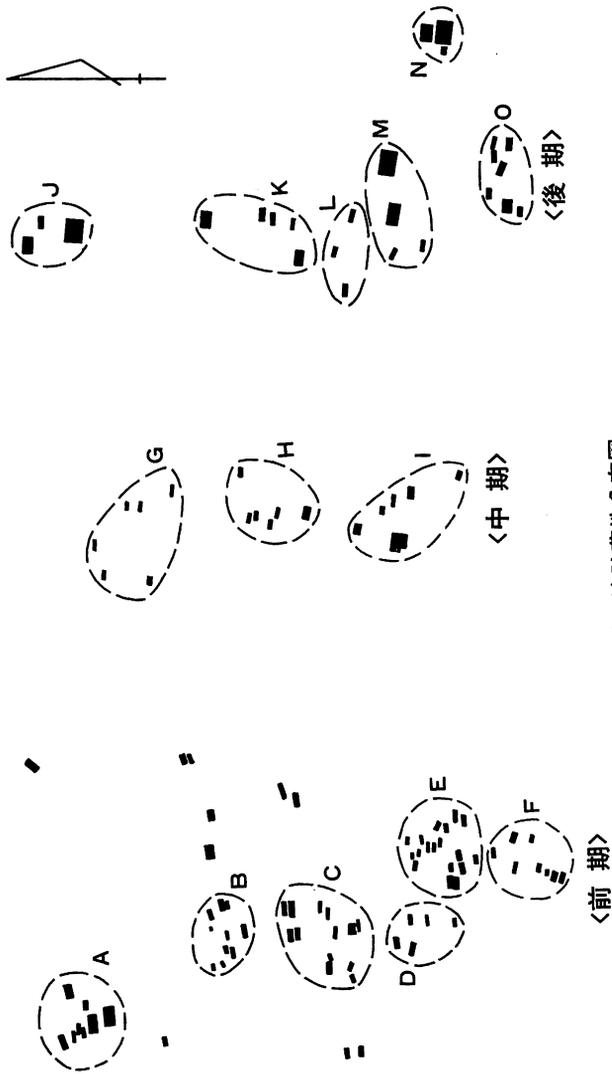


图1 大汊口遺跡地分布图

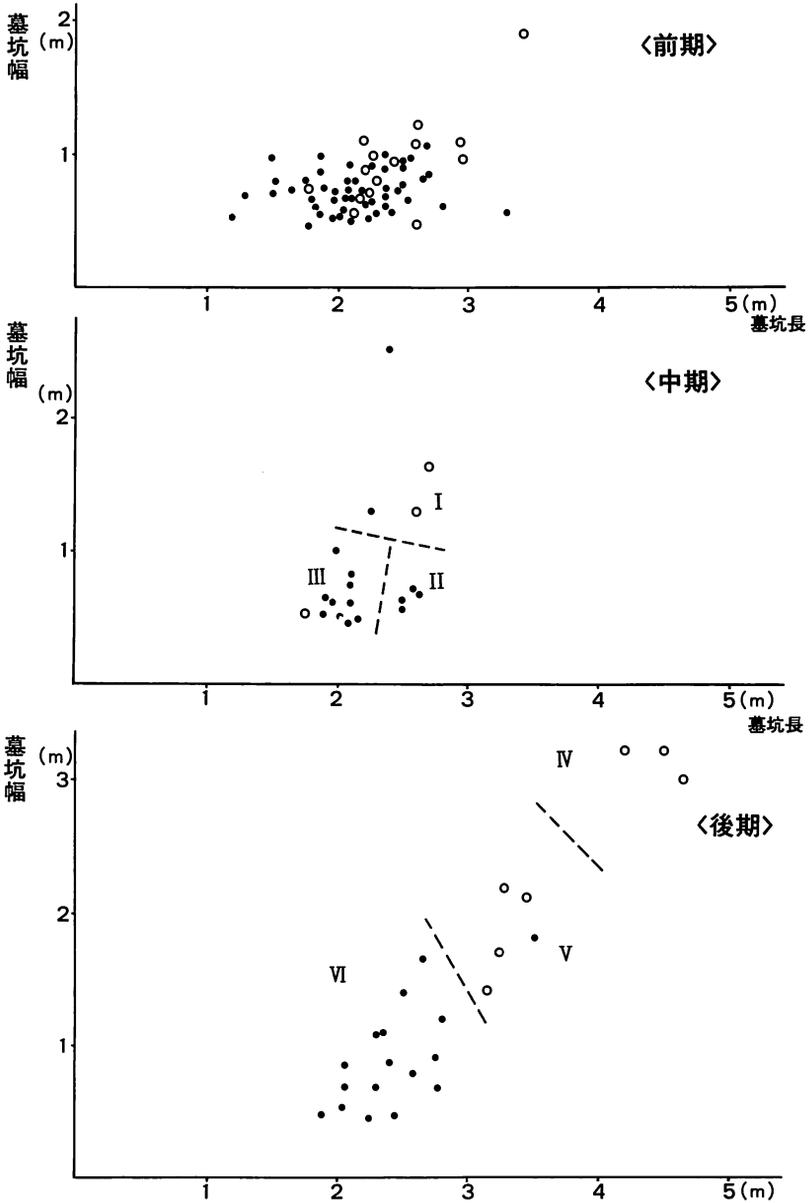


図2 墓坑規模の変異と質的階層性 (○：二層台・木槨墓)

り無頸の大罐（壺）と、豆を倒立させたような器蓋が各1点出土している。これらは後期10号墓出土例と相似し、窯跡に確実に伴うものであるならば、墓地と陶窯が一時期共存する可能性が高く、興味深い。ただし、現在のところ類例がなく、その意味については検討できない。

④ 表現・階層化要素

墓坑はいずれも平面長方形の竪穴土坑で、その規模は一般に長さ2.5m、幅0.7m前後とされるが、変異の幅を持つ（図2）。

前期墓では、いくつかの突出例はあるものの、長さ1～3m、幅1m前後に集中し、その変異は連続的であると考え。中期墓では、幅では1m以上と以下、長さでは2.2m前後を境として、I・II・III群に、後期墓は、IV・V・VI群に分類する。そして、それぞれ群間にI→II→III群、IV→V→VI群（上→下）という数量的階層性を認める。

墓坑の形態には、単純な長方形竪穴と、その土坑底部により小さな遺骸埋葬用の長方形土坑を穿つ「二層台」土坑とがある。後者は前者よりも労力がかかり、作りが丁寧であると考え、二層台を作る墓を上位とする質的階層性を認める。

地下施設としては「木槨⁽¹¹⁾」を有する例がある。報告によればその形態は3種類あるというが、種類不明の墓もあるため、構造の違いは捨象し、木槨を作るものを上位とする質的階層性を認める。

地上施設に関する報告はない。

次に副葬品であるが、本要素は数量的・質的にもっとも変異の幅が大きく、かつ把握しやすい階層化要素であると考え、次章の分析において中心的役割を持たせる。

本遺跡から出土する遺物を、大きく人工遺物（加工品も含む）と自然遺物とに分類する。人工遺物には、材質的に分類すると、土製・玉石製・骨角牙貝製があるが、機能的に、容器（土器）・工具・装身具・その他（機能・用途不明を含む）に分類する（表3）。

表3 副葬品の分類 ((.)内は点数)

	容 器	工 具	装 身 具	そ の 他
土 製	鼎(171)・豆(122)・壺(218) 罐(142)・杯(177)・罍(30) 盃(20)・尊(30)・瓶(71) 盛形器(4)・盆(3)・匜(4) 鉢(6)・碗(11)・獸形器(1) (器蓋(83))	紡錘車(5)	臂環(1)	
玉 石 製		鏃(27)・斧(10)・鏃(63) 鏃(5)・砺石(27)・鏃(3) 磨棒(2)・矛(1)・紡錘 車(26)	笄(29)・環(3)・頭飾(6串) 頸飾(2串)・環(2)・臂 環(16)・指環(5)・管(2) 珠(1)	赤鉄鉱石(2)・石片(2)・ 石餅(7)・石球(1)
骨 角 牙 貝 製		牙鏃(21)・蚌鏃(3)・骨 鏃(1)・牙刀(53)・骨鏃 (10)・骨矛(7)・骨鏃 (23)・骨鏃(50)・箭尾 (7)・釣針(3)・骨梭形 器(4)・骨針(30)・骨針 管(4)・骨錐(47)・骨匕(24)	象牙梳(2)・束髮器 (21.5)・笄(1)・臂環(4) 指環(15)・象牙珠(1)・ 象牙片(2)・象牙管(1)・ 骨彫筒(16)・象牙彫筒 (10)・象牙琮(7)	骨料(37)・角料(5)・牙 料(148)・長方骨板(1)・ 龜甲(20)・獐牙(188)・獐 牙鈎形器(1)・猪門牙 (15)・骨板(13)・角墜 (8)・器把(1)・鈎形器 (2)・鈎(8)

これら副葬品の数量的把握については、人工遺物は基本的に1遺物1点でカウントするが、いくつかの例外をもうける。

まず土器の器蓋は独立した副葬品とは考えられないので、カウントしない。次に装身具のうち、首飾り・腕飾りと報告されている遺物は、出土状況の観察と穿孔の存在から、紐でつながっていたと考えられており、何点かで「一串」と報告されている。「一串」内の数量はさまざまであるが、本稿では、報告において「一串」と判断されている装身具1組を1とカウントする。また束髮器とされる遺物は、出土状況より2点1組と判断し、2点で1とカウントする。また、「骨・牙・角料」は骨角牙製品の原材料とされるもので、他の副葬品と同等には扱えないと考え、ひとまとまりとして1点とカウントする。

自然遺物も報告に従って1点を1とカウントするが、やはりいくつかの例外をもうける。

鱈の鱗片は10号墓より84片出土しているが、固まって出土する状況より、鱈皮として扱われていたと考える(邵 1989)。2つの塊があるので、2点とカウントする。また魚骨も1塊を1点とカウントする。

豚の骨は、頭骨・下顎骨が出土する場合以外は、出土数＝個体数とは限らない。また、頭骨と他の骨が共伴する場合、同一個体かどうかは判断できない。さらに、副葬された鼎内より出土する豚蹄骨は、葬送儀礼に伴う調理・飲食の可能性がある。しかも、豚の骨は他の自然遺物にくらべ出土例が比較的多い。つまり、豚は数量的に不確定な部分が多く、最初から加えてカウントすると、数量的把握を混乱させる恐れがあると考え、数量的把握には含めない。ただし、後述するように豚の出土に質的な階層性を認め、豚骨を階層化要素として扱う。

以上のカウント方法によって各墓の副葬品の数量を把握し、より多い墓を上位とする。

次に質的階層性の把握については、まず、その入手・製作にさいして、他の遺物にくらべ、より多くの労力・時間・技術を要したと考える要素に対して、出土する墓を上位とする階層性を認める。⁽¹²⁾このような要素は、玉・トルコ石・象牙製品、鱧の鱗片である。これらの原材料はいずれも遺跡外部に由来するとされる遺物であり、その入手の困難さを想定し、その副葬を上位とする（渡辺 1989a）。

また豚の副葬は、豚が食料であり、副葬に伴う経済的損失を想定し、その出土を上位とする階層性を認める。

以上は原材料的な側面からの質的階層性の把握であるが、人工遺物の場合はさらに製作技術の問題が関係する。

まず土器についてであるが、筆者はかつて山東竜山文化の呈子遺跡を検討したさい、副葬される蛋壳黒陶が、他の土器より高度な製作技術が要求されると想定し、その有無に質的階層性を考えた（渡辺 1987）。本遺跡の場合、蛋壳黒陶のように突出した形で上位性を示す土器は認められないと考える。もちろん、製作時における「丁寧さ」という観点からの階層性認識の可能性は存在する。⁽¹³⁾その一方で製作技術は土器の機能的必要性とも結びついている。それゆえ、ある技術的要素（例えば研磨の有無など）に階層性を求めることは可能ではあるが、土器製作工程が十分把握されていない現状において、機能的必要性と混乱する恐れがあるため、本稿では土器内部における階層性については取り扱わな

い。このことは工具・装身具においても同様である。

また、土器・工具・装身具の各分類単位間における階層性については、やはり機能差と階層性の混乱を導き入れる可能性があるので、本稿では階層性を想定しない。

(3) 分析対象要素の選択

前章で述べたように、本稿で採用する方法には、斉一性の高い要素は検討できないという制約が存在する。大汶口遺跡の場合では、埋葬態位・頭位方向・単位の埋葬遺骸数が検討の対象から除外される。

また、不明の要素についても検討は不可能であり、人為的加工・遺伝的形質・健康状態・地上施設・遺跡の立地・他の遺構との位置関係が、検討の対象から除外される。また、被葬者の性別・年齢は被葬者のもっとも基本的な要素であるが、その情報は決して多いとはいえない。そのため、性・年齢判定された少数例と他の階層化要素との関係から見られても、それを遺跡全体に敷衍するには危険性が伴う。それゆえ本稿では検討の対象から除外しておく。

以上より、本稿で検討の対象とする墓地構成要素は以下のものである。

- ① 非表現・非階層化要素：なし
- ② 非表現・階層化要素：なし
- ③ 表現・非階層化要素：分布の疎密（墓群）
- ④ 表現・階層化要素：地下施設（二層台・木槨）・副葬品

4 分析

(1) 階層化要素における連続性と不連続性

① 墓坑規模

墓坑規模は、前期墓では連続的な変異を示すのに対して、中・後期墓ではともにグルーピングが可能であり、さらに後期墓における各群間の変異は中期墓にくらべ大きいと考える。つまり、墓坑規模における階層性は、時期が下るとつれ、連続的変異から不連続的変異へ、そして不連続性の増大とに変化したと判断し、階層性の程度が高まると考える。⁽¹⁴⁾

② 副葬品

副葬品総数・土器数・工具数・装身具数の各平均値は（表4）、時期が下るにつれ増加する。ただし、このことはすべての墓の副葬品数が増加するわけではなく、次に述べるように、むしろ個々の墓の間の差の増大によるところが大きいと考える。

表4 各時期の副葬品数の平均（単位：点）

	前期墓	中期墓	後期墓
土器	5.2	8.8	20.9
工具	2.8	4.8	6.9
装身具	2.9	2.9	6.5
全体	10.9	16.5	34.4

副葬品総数・土器数・工具数・装身具数の変異は（図3）、装身具を除いて、時期が下るにつれて不連続性が増大すると考える。

次に質的階層性において、玉・トルコ石・象牙製品の3種を副葬する墓内での数量的階層性を検討する（表5）。前期墓では器種の差はあるものの、いずれも3点である。それに対して、中期墓では差異が表れ、後期墓では10号墓がいずれの要素においても多く、かつ数量に大きな差がある。つまり、質的階層性の上位においても、その数量的変異は不連続性が増大すると判断する。

（2）階層化要素間の関係

① 墓坑の規模と形態（図2）

前期墓における墓坑規模の階層的変異に、二層台・木槨の有無を重ね合わせると、比較的大型の墓に伴う一方、小型の墓にもつくられており、墓坑規模の数量的階層性と、二層台・木槨の質的階層性の相関は低いと考える。

中期墓になると、墓坑規模I群3基のうち、とくに大型の2基に二層台が作

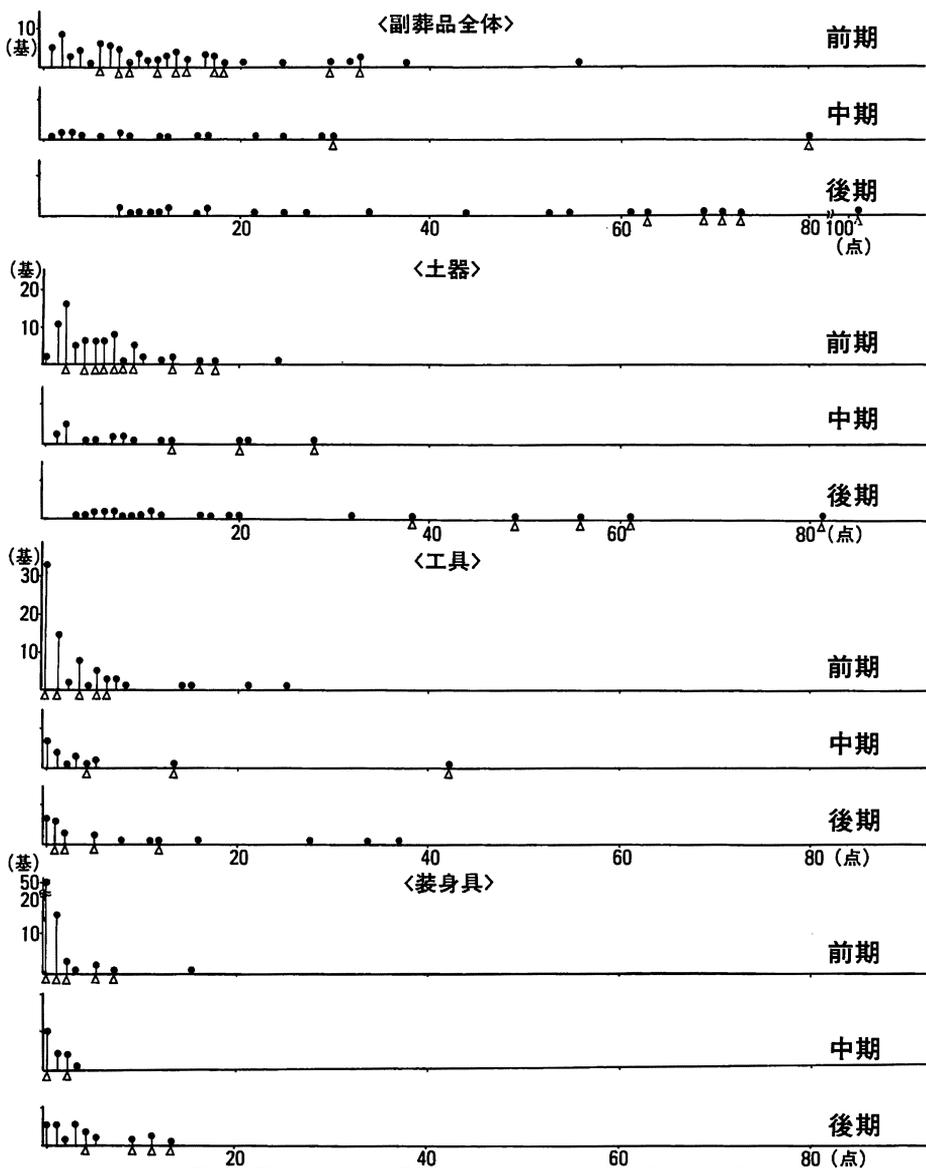


図3 副葬品数の変異 (縦軸：墓数；横軸：副葬品数)
(△：豚副葬墓)

表5 玉・トルコ石・象牙製品出土数 (横田 1983より改変)

	トルコ石	玉 製 品						象 牙 製 品					鍔 鱗 片		
		鏝	鑿	弁	環	脚	指 輪	管 玉	梳	珠	片	管 玉		彫 筒	琮
前期墓	13号											1	2		
	26号								1					2	
	59号											1	2		
中期墓	22号	3													
	49号				1										
後 期 墓	1号							1							
	2号									1					
	4号	5		1											
	10号	19	1				1	1		1		2	1	2	2
	17号												1		
	25号				1										
	60号	1													
	77号												1		
	117号		1		1									2	
126号													2		

られていることから、墓坑規模の数量的階層性と質的階層性との相関が、前期より高いと考える。しかし、逆にもっとも小型の墓においても二層台が作られており、両者の階層性が完全に一致するわけではないと考える。

後期墓では、二層台・木槨は、IV群ではすべて、V群では5基中4基が両者もしくはいずれかを作っている。両者の相関は、中期墓より高いと考える。

以上により、墓坑規模の数量的階層性と質的階層性は、時期が下るとともに相関が高まり、階層性の程度が高まったと評価する。

② 副葬品

本項では、まず副葬品のうち人工遺物である土器・工具・装身具の3者の数量的階層性間を時期別に検討し、そののち、豚、玉・トルコ石・象牙製品などの質的階層性を重ね合わせ、副葬品の階層性を分析する。

図4は、前期墓の土器数と工具数をグラフ化したもので、横軸は土器の数量的階層性を、縦軸は工具のそれをあらわす。

その結果、土器数15点以下、工具数10点以下では密集し、階層性はよみとれ

ない。しかし、土器数15点以上、工具数10点以上、20点以上がそれぞれグルーピングできると考える。このことから、副葬品の数量的階層性には、土器数の多寡によって表現される階層性（以下「土器系階層性」と呼ぶ）と、工具の多寡によるそれ（「工具系階層性」）の二系列の階層性が存在していると考えられる。

次に土器数と装身具数との関係では、54・26号墓を除いて、土器系と装身具数の階層性の相関は高いと考える。54号墓は空墓であり、装身具が本来被葬者の身体に伴う物であることから、装身具の少なさは、空墓という特殊性に由来するものと考えられる。26号墓の存在は、装身具の階層性が土器のそれと必ずしも一致するわけではないことを示すと考える。

このことは、工具数と装身具数との関係からもわかる。つまり、26号墓は工具・装身具をともに多くもつ、前期墓ではやや特殊な墓と位置づける。

以上より、土器・工具・装身具の各要素の数量的階層性の関係では、土器系階層性と工具系階層性の少なくともふたつの系列の階層性が存在していた可能性があり、装身具数の階層性は、完全に一致するわけではないが、土器系階層性に近いと考える。

次に副葬品の質的階層性との関係であるが、まず豚の副葬では、土器系・工具系の上位墓からはいずれも出土するが、一方で副葬品の少ない墓にも多く副葬されている。少なくとも豚の質的階層性と、副葬品の数量的階層性の相関は低いと考える。

玉製品の副葬は58号墓1基のみであり、詳しい検討はできないが、58号墓は土器9点、装身具2点という小型の墓であり、副葬品の数量的階層性と玉製品の副葬による質的階層性の相関は低いと考える。

象牙製品は59・13・26号墓の3基から出土するが、前2者は土器系の、後1者は工具系・装身具系の最上位墓である。土器系最上位の54号墓は空墓であり、装身具としての象牙製品の不在は空墓であることに由来すると考える。つまり、象牙製品の質的階層性は、土器系・工具系を問わず、副葬品全体の数量的階層性と相関が高いと考える。

中期墓（図5）においては、土器数と工具数との関係で、75・98・35号墓など

が、前期墓で想定した土器系階層性に近い様相を示すと考える。しかし、明確な工具系階層性は認められない。むしろ、9・67号墓の存在は、土器系階層性と工具系のそれとが一部相関する可能性を示すと考える。とくに9号墓は土器数・工具数の最上位墓であり、前期墓にはない様相である。装身具は中期墓では出土例が少なく、土器・工具との関係を検討するには十分ではないと考え、検討を保留する。

質的階層性では、豚は4基より出土するが、いずれも副葬品の少ない墓であり、むしろ、副葬品の数量的階層性とは排他的な関係にあるとの判断も可能である。トルコ石製品の副葬は1基のみであるが、副葬品数は多くなく(13点)、相関は低いと考える。

後期墓(図6)における土器数と工具数との間には、前期墓と同様に、土器系階層性と工具系階層性の2者が存在すると考える。土器数と装身具数との関係では、60・126号墓が空墓であるので、前期54号墓と同様の理由で除くと、両者は相関すると考える。工具数と装身具数との関係では、土器系と判断したものの中に、両者を比較的多くもつ例が存在するものの、土器数と装身具数との関係にくらべると相関は低いと考える。つまり、後期墓においても前期墓と同様に、土器系階層性と工具系階層性の2者が存在し、装身具による階層性は土器系階層性に近いと考える。

質的階層性では、豚の副葬は土器系・工具系階層性の上位墓に見られ、両系と相関が高いと考える。玉製品は、5号墓を除いて土器系・工具系上位墓に副葬される。トルコ石製品は土器系上位・中位墓、工具系上位墓に副葬されている。象牙製品は、1基を除き、土器系上位墓、工具系中位墓に副葬される。⁽¹⁵⁾

以上により、副葬品の質的階層性で上位とする要素は、土器系・工具系を問わず数量的にも上位とする墓に副葬されており、前・中期にくらべ相関が高いと判断する。ただし、土器系と工具系とを比較すると、質的階層性は前者の方がやや相関が高いと考える。

③ 墓坑と副葬品

前期墓における墓坑の質的階層性と副葬品数との関係(図3・4)では、副

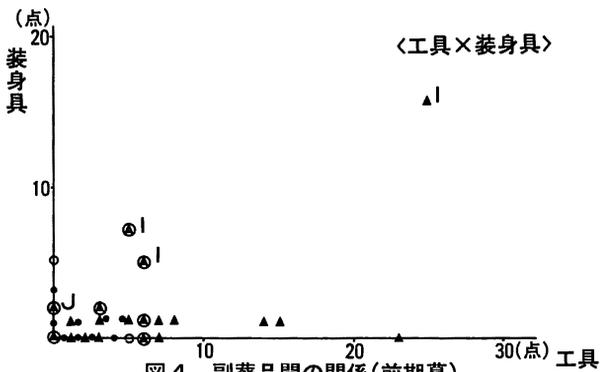
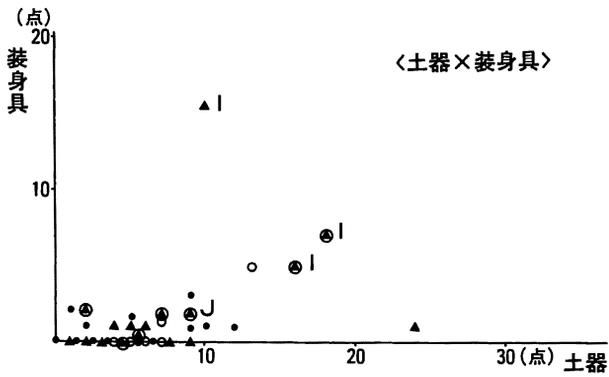
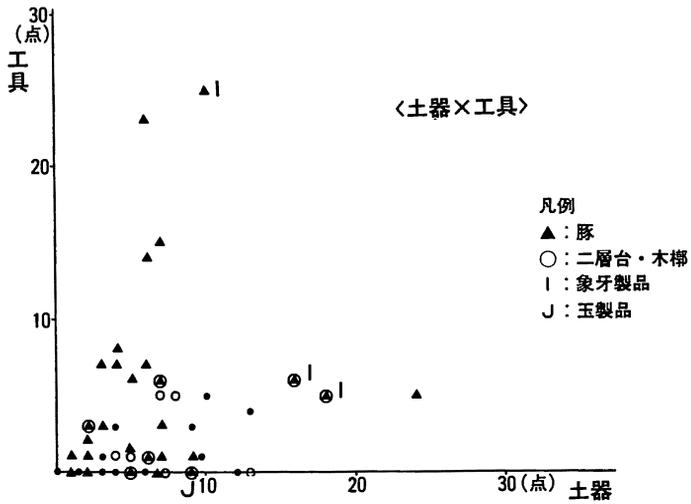


図4 副葬品間の関係(前期墓)

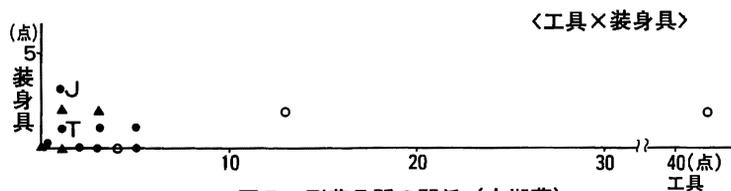
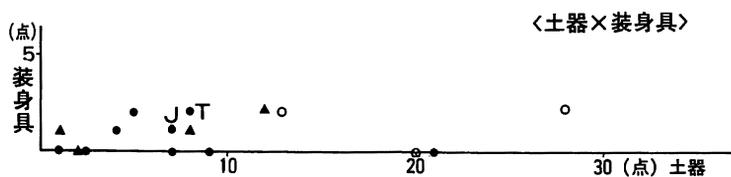
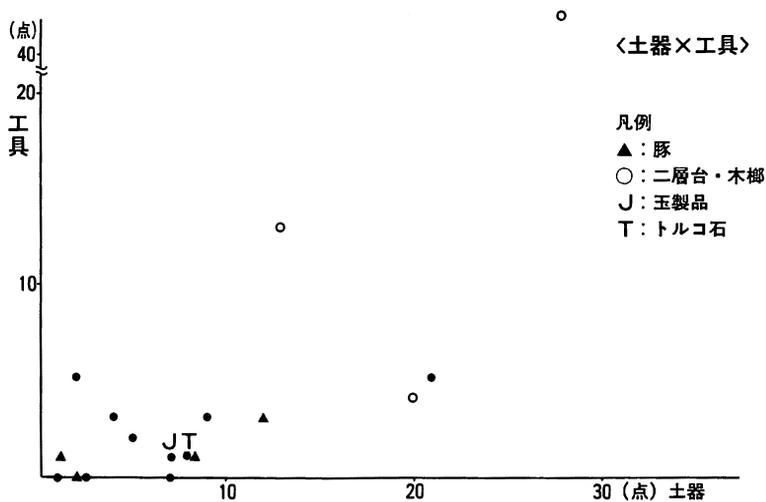
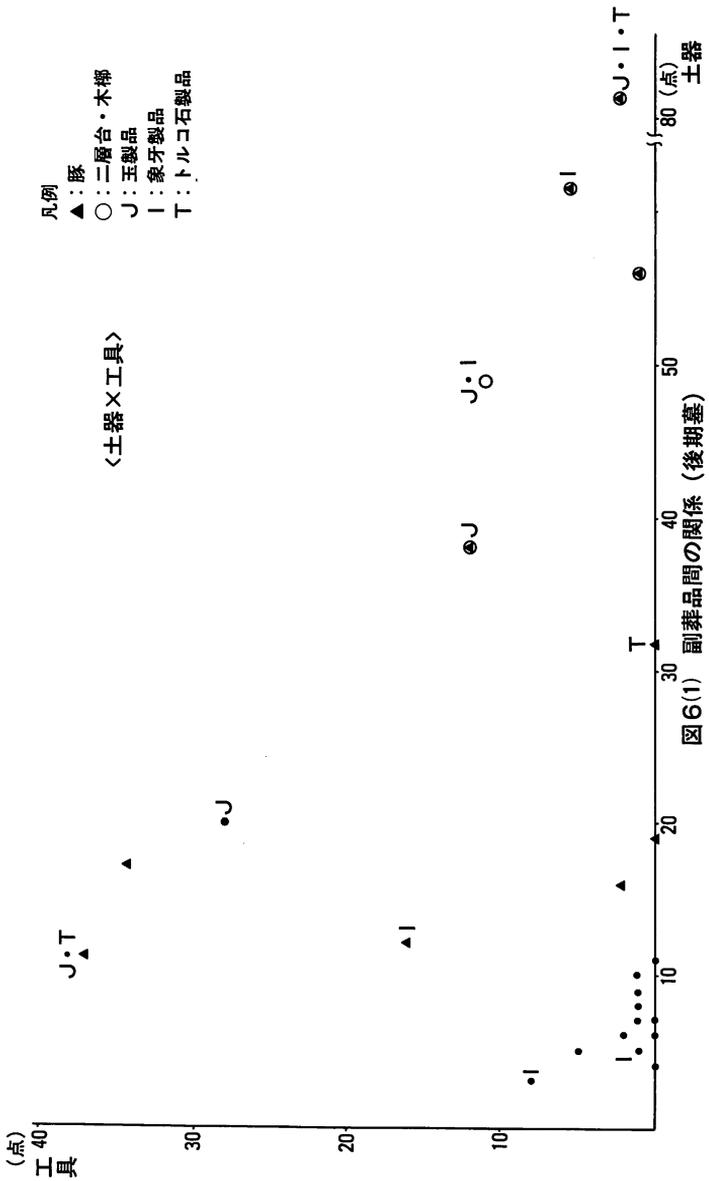


図5 副葬品間の関係 (中期墓)



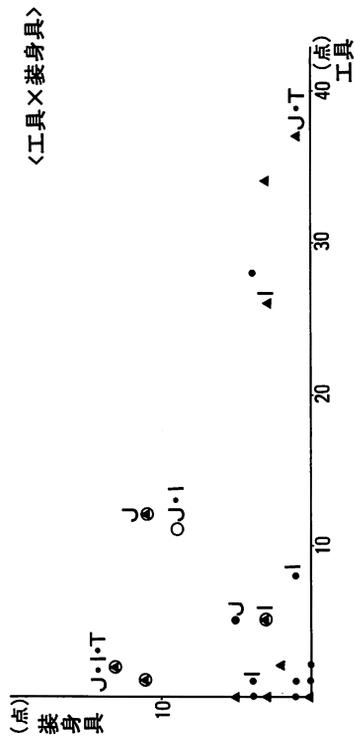
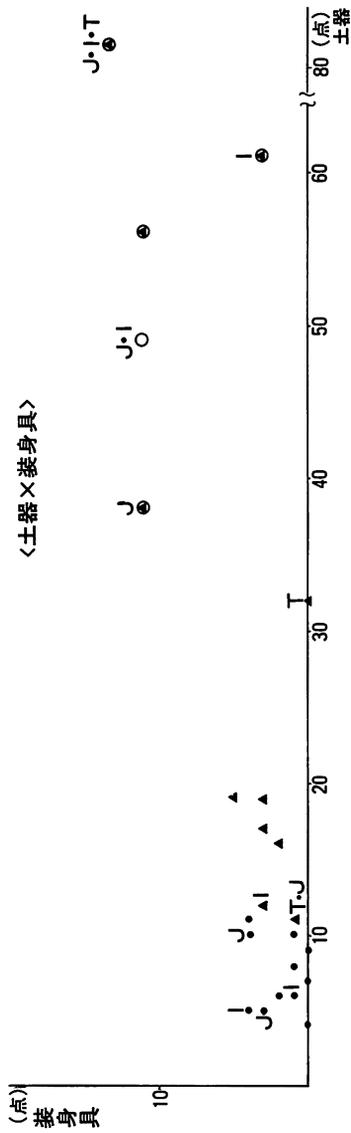


図6(2) 副葬品間の関係(後期蓋)

葬品の少ない墓にも二層台・木槨が作られており、両者の相関は低いと考える。

次に墓坑規模の数量的階層性と副葬品との関係であるが、前述したように前期墓における墓坑規模の階層の変異は連続的であり、分類単位間の比較という形では検討できない。そこで、変異幅の大きい墓坑長軸の変異と副葬品の階層性との関係を検討する(図7)。その結果、副葬品数と墓坑規模との間には、明確ではないが相関らしき関係が存在すると考える。土器系・工具系の差異はないと考える。質的階層性との関係では、豚、玉製品とは相関しないと考える。象牙製品は副葬品数全体の階層性と相関するので、墓坑規模の階層性において上位に副葬される。

中期墓では(図5)、75号墓を除いて、9・67・98号墓など副葬品を多くもつ墓に二層台・木槨が作られていることから、墓坑の質的階層性と副葬品との関係は、前期墓にくらべて相関が高いと考える。

墓坑規模の数量的階層性と副葬品との関係では(図8)、I群が上位、II群が中位、III群が下位という全体的な傾向があると考える。ただし、75・67号墓が端的に示すように、重なり合う部分も大きく、相関はそれほど高くないと考える。豚、トルコ石製品とは相関しないと考える。

後期墓における墓坑の質的階層性との関係では、土器系上位墓にはほとんど二層台・木槨が作られるのに対して、逆に工具系上位墓にはまったく作られていない。(図6)。つまり、墓坑の質的階層性は、副葬品数の土器系階層性とは相関するが、工具系階層性とはむしろ排他的関係に近いと考える。

ここでひるがえって、前期墓における墓坑の質的階層性と副葬品数との関係を見ると(図4)、前期墓では両者の相関は低いが、土器系上位墓に二層台・木槨が作られているのに対して、工具系上位墓には後期墓と同様に作られていない。前期墓の場合、土器系か工具系か判別できない墓にも多く二層台・木槨が作られているため、後期墓のように明確ではないが、墓坑の質的階層性をめぐって、土器系と工具系の間、後期墓に近い関係が存在していた可能性がある⁽¹⁶⁾と考える。

墓坑規模の数量的階層性との関係では(図9)、IV群はすべて土器系上位墓で

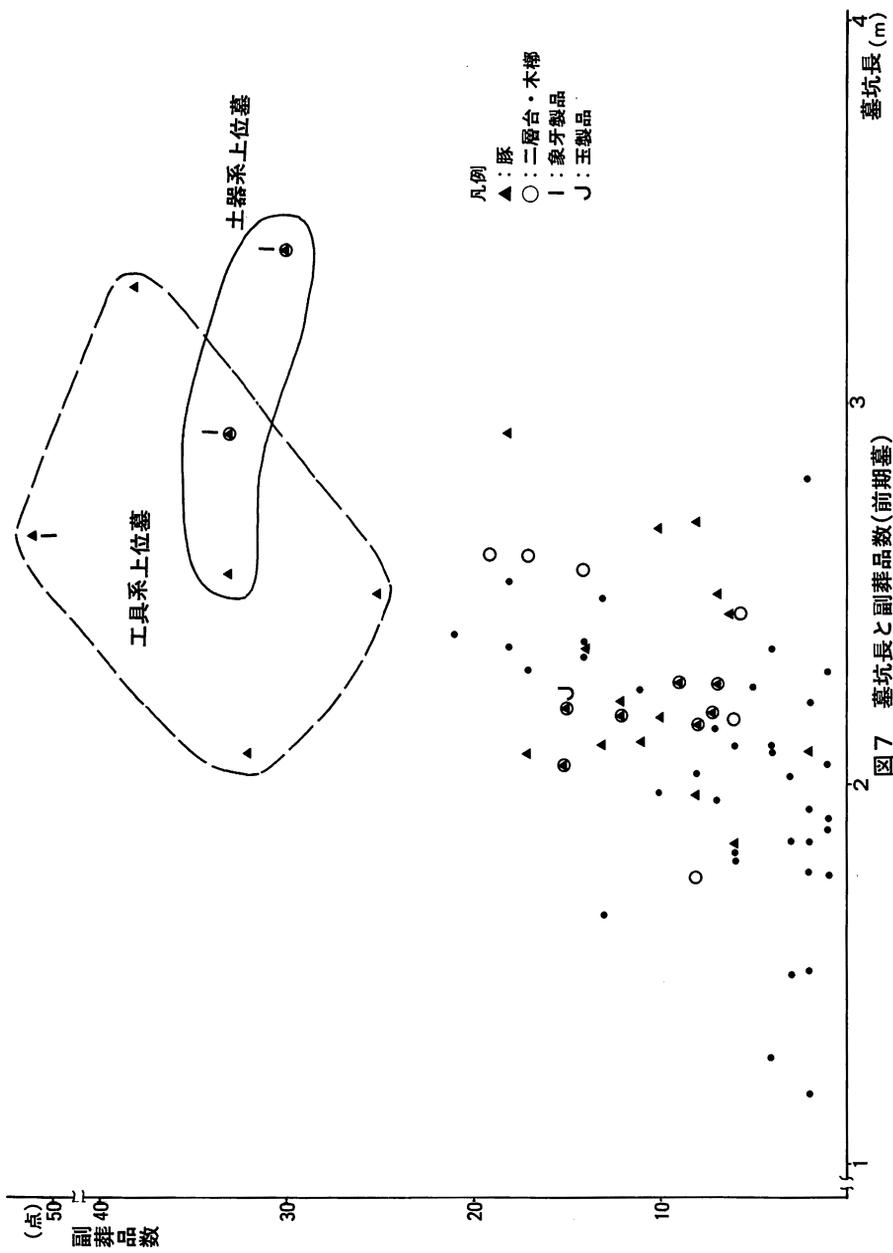


图7 墓坑長と副葬品数(前期墓)

ある。V群は土器系上位が3基、下位が2基である。前述したように土器系と装身具が相関するので、空墓を除いて、装身具数の階層性も土器系とほぼ同じ状況であると考えられる。それに対して、工具系はすべてVI群に含まれ、相関しないと考えられる。

副葬品の質的階層性との関係では、前節で述べたように、土器系・工具系両系の上位墓と相関するので、土器系とは相関するが、工具系とは相関しない。

④ 小結

本節の分析結果を模式的にまとめると図10になる。また以下のようによまとめられる。

- (1) 副葬品・墓坑における数量的・質的階層性は時期が下るとともに相関が高まる。つまり階層性の程度が高まる。
- (2) しかしその一方で、副葬品の数量的階層性において複数系列の階層性がみられ、副葬品の質的階層性や墓坑の数量的・質的階層性との関係において差が見られる。

(3) また、この複数系列の階層性

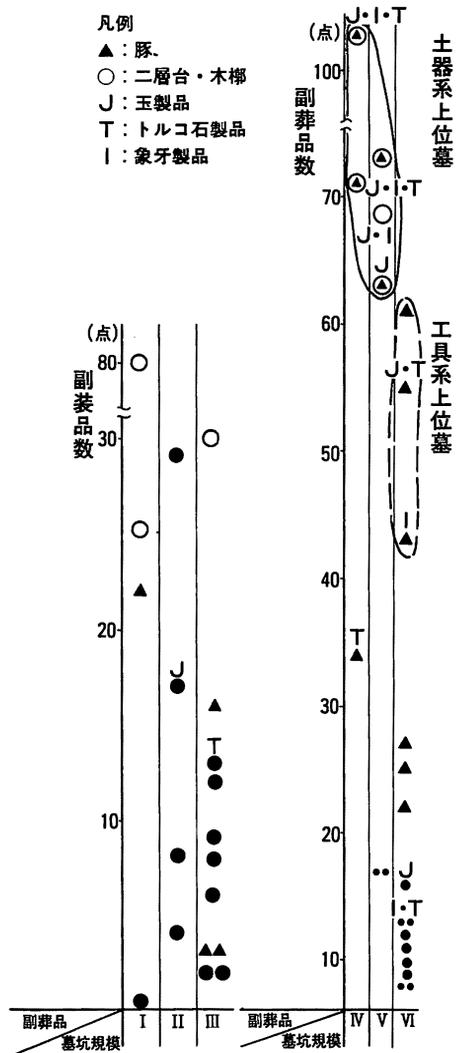


図8 墓坑規模と副葬品(中期)(左)
 図9 墓坑規模と副葬品(後期)(右)

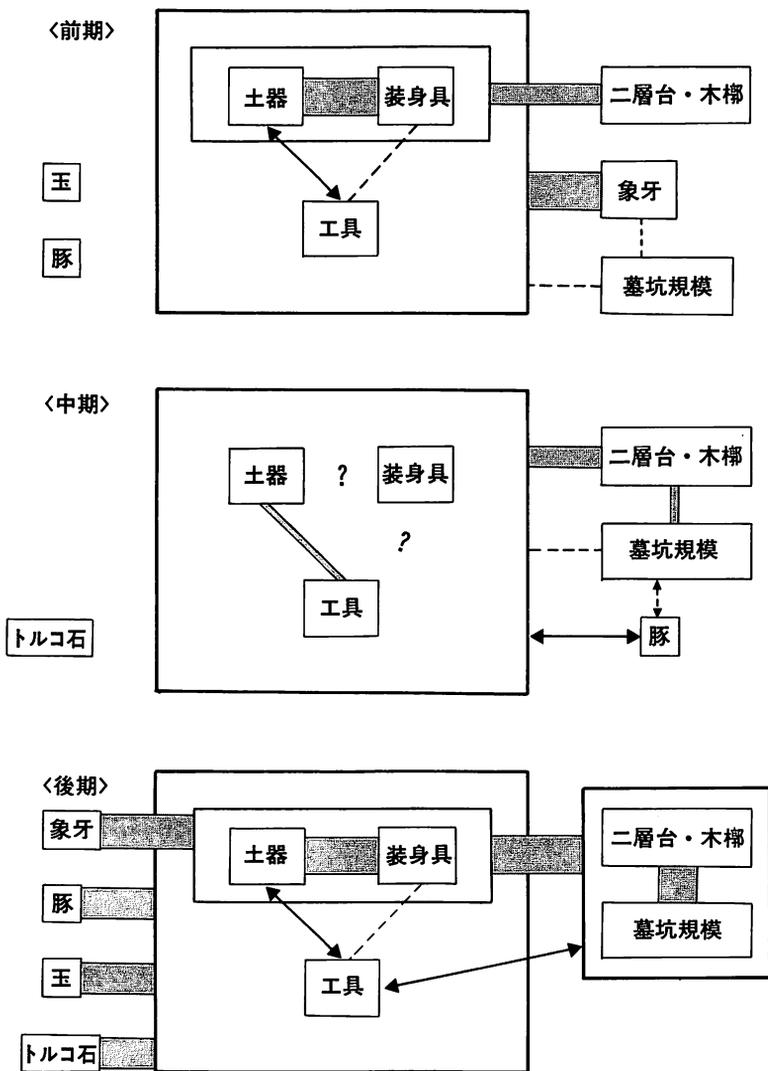


図10 階層化要素間の相関関係模式図
 (網線の太さは相関の高さを示す)
 (↔: 排他的関係 ; …: 相関アリ?)

は、中期でははっきりしないが、前・後期墓において認められ、大汶口遺跡において「共存」していた可能性が高い。

(4) つまり、複数列の階層性は、単に副葬品の数量的階層性だけでなく、当墓地における階層性全体の中で「共存」していた可能性がある。

(3) 階層化要素と表現・非階層化要素

ここでは墓群と階層化要素との関係を検討する。

まず墓坑の階層性との関係を検討する。前期墓(図11)の墓坑規模の階層性は前述したように連続的であり、各墓群内においてもほぼ同様であるが、A群が全体的にやや大型であると考ええる。質的階層性においても、二層台・木槨はA群のみ8基中5基と、他の墓群に比べ高い頻度で作られている。以上より、前期墓における墓群と墓坑の階層性の関係は、A群がやや上位で、他の群の間には大きな差は認められないと考える。

中期墓では(図12)、各墓群に、墓坑規模Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群がほぼ大差なく存在し、二層台・木槨墓も1基ずつあることから、墓群単位間では差はないと考える。

後期墓では(図13)、J・M・N群は墓坑規模Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群すべてより、⁽¹⁷⁾K・O群はⅤ・Ⅵ群より、L群はⅥ群のみより構成される。また、前述したように、後期墓では墓坑の数量的階層性と質的階層性は相関するので、L群以外の、Ⅳ・Ⅴ群をとまなう墓群にはそれぞれ二層台・木槨をつくる墓が含まれる。その数に大きな差はないと考える。つまり、後期墓では、各墓群間には墓坑の階層性上位墓の有無という差異が認められるが、墓群単位で階層性と結びつく状況はないと考える。

以上により、墓坑の階層性は、前期墓においてわずかながら墓群単位での結びつきが認められるものの、中・後期墓では、墓群内部で階層性がより顕著になり、なおかつ階層性上位の墓の有無という形で墓群間に差異があると考ええる。

次に墓群と副葬品の階層性との関係を検討する。まず副葬品全体のばらつきと墓群との関係では(図14)、前期墓では、15点以下の副葬品をもつ墓のみより構成されるB・D・F群、40点以下の副葬品の墓より構成されるC・E群、15点以上56.5点以下のA群の3種類に分類できると考える。A群は56.5点を副葬

する1基を除くと、C・E群との間に大きな差はないが、15点以下の墓を伴わない点でC・E群よりやや上位であると考え。また、16点以上の墓の有無によって、C・E群とB・D・F群の間には差異があると考え。中期墓では、H群に突出した1基があるほかは、墓群間に大きな差はないと考える。H群とG・I群との関係は、前期墓におけるC・E群とB・D・F群との関係に近いと考える。後期墓では、各墓群間の変異幅の違いはあるが、それは主として上位墓の副葬品数の差であり、このような状況は、前期C・E群とB・D・F群、中期H群とG・I群との関係に近いと考える。

以上より、前期墓において墓群単位間ではA群を上位とする階層性が認められるが、中・後期墓においては、墓群単位間での階層性よりも、墓群内部における階層性がより顕著であり、墓群内部での階層性の上位墓の有無および最上位墓間での違いによって、墓群間に差異があると考え。

副葬品の質的階層性との関係においては(表6)、前期墓ではD・F群に豚の副葬はなく、象牙製品はA群においてのみ見られる。中期墓では、豚の副葬は全墓群で見られ、トルコ石・玉製品はそれぞれH・G群に見られる。後期墓では、豚の副葬はやはり全墓群で、象牙製品はO群以外で、トルコ石・玉製品はJ・K・M・N群に見られる。

以上より、質的に上位の副葬品は、時期が下るにつれより多くの墓群に副葬されるようになる⁽¹⁸⁾と考え。

表6 墓群別の質的階層性 (単位:基)

時期	前期墓						中期墓			後期墓						
墓群	A (8)	B (10)	C (15)	D (5)	E (18)	F (8)	G (6)	H (6)	I (7)	J (3)	K (5)	L (3)	M (4)	N (3)	O (7)	
玉							1			1	2		1	1		
象牙	3									1	1	1	1	2		
トルコ石								1		1	1		1			
豚	6	5	7		7		2	1	1	2	2	2	3	1	1	
二層台	4	1	2		2		1	1	1	1			1	1	1	
木椀	2	1			2	2				1	1		2	2	1	

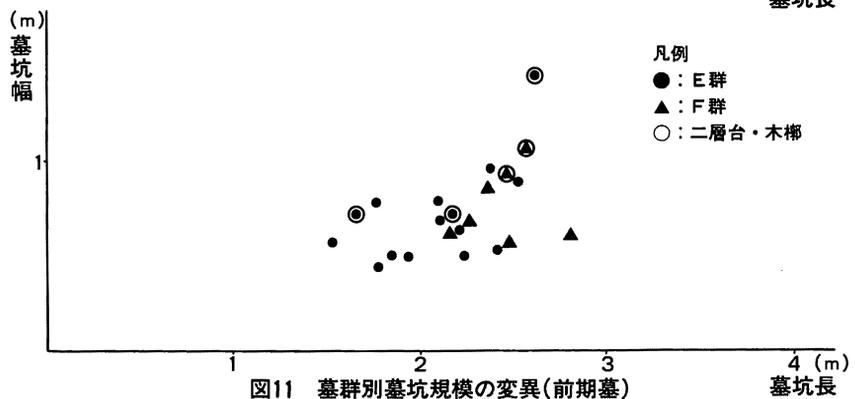
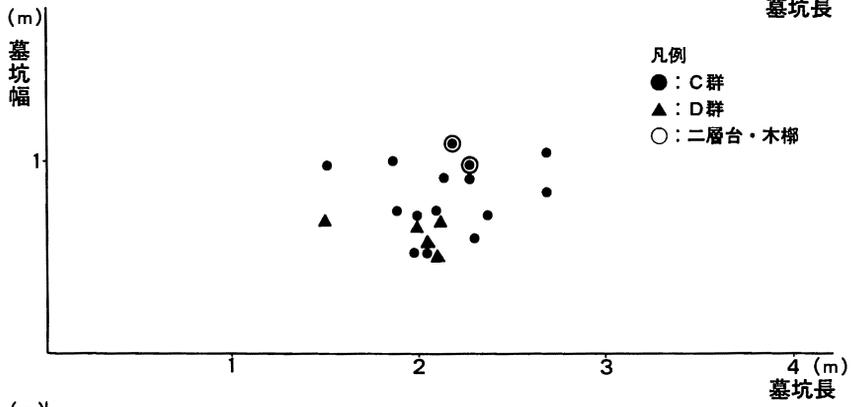
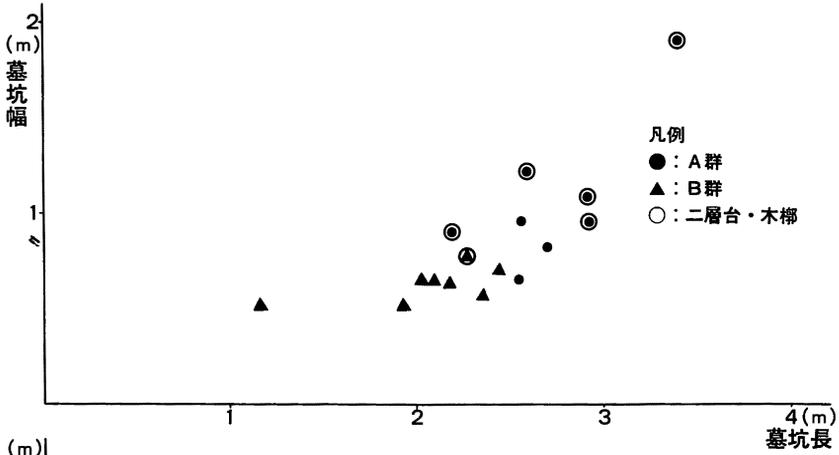
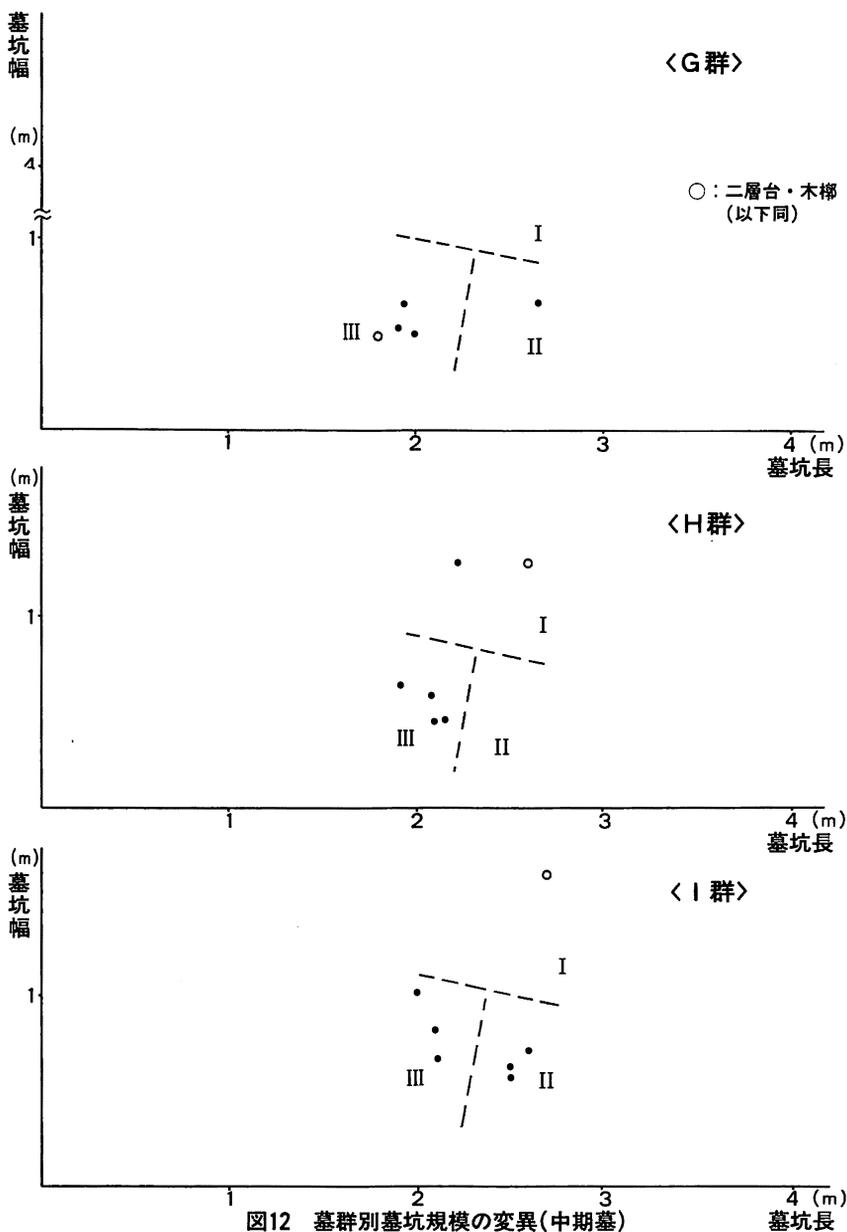


図11 墓群別墓坑規模の変異(前期墓)



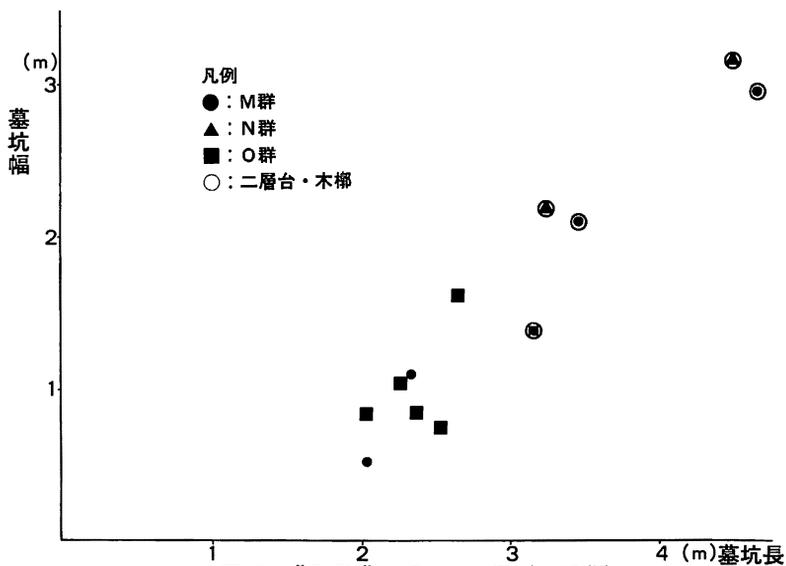
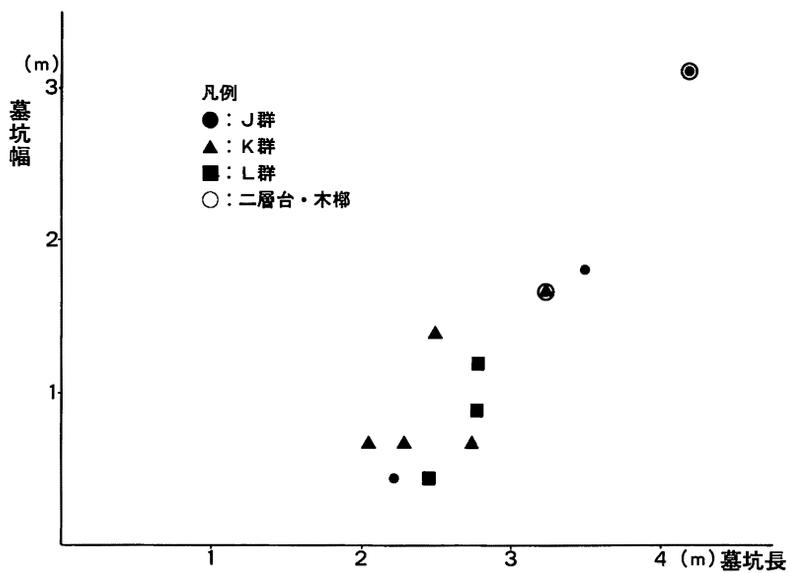


図13 墓群別墓坑規模の変異 (後期墓)

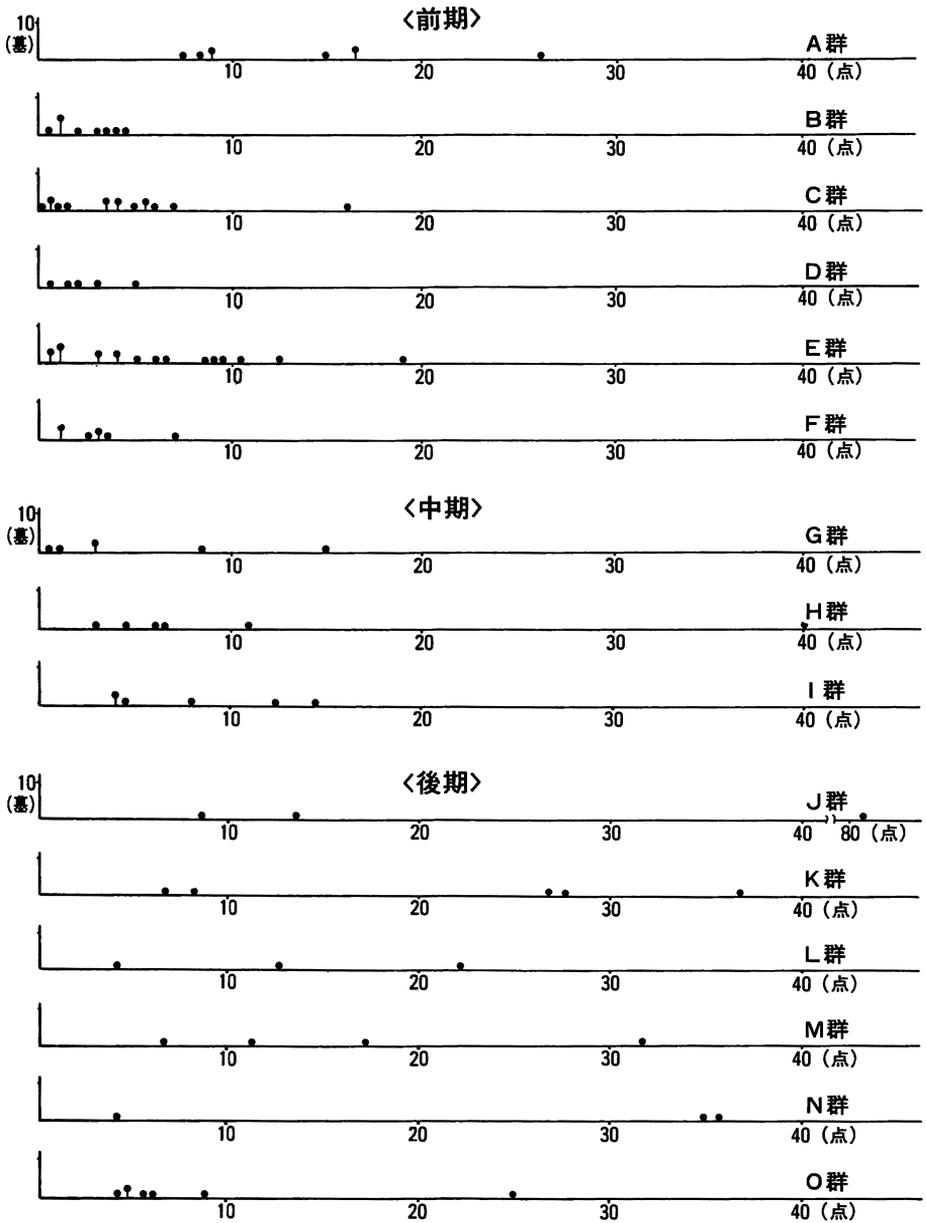


図14 墓群別副葬品数の変異 (縦軸：墓数；横軸：副葬品数)

しかし、前述したように、後期墓においては、これら質的に上位の要素は、一部の墓に集中して伴うようになる。つまり、各墓群内において質的に上位の要素を持つ墓と持たない墓とが混在しており、なおかつ、その質的に上位の要素を持つ墓の有無によって、墓群間に差異が表れていると考える。

このような、墓群と副葬品の数量的・質的階層性との関係は、先に検討した墓群と墓坑の階層性との関係に近いものであると考える。

最後に、副葬品における複数系列の階層性との関係について検討する(図15・16・17)。

前期墓では、B・D・F群は副葬品が少なく、土器・工具両系の上位墓は含まれていない。それに対しA群にはすべての上位墓が含まれている。C・E群には工具系の上位墓が含まれている。なお、A・C・E群の副葬品数最多墓はいずれも工具系である。中期墓では、G・H群において、土器・工具ともに多い13・9号墓が突出し、I群では土器系の75・98号墓が上位である。後期墓では、J・M・N群では土器系上位墓が、O群では工具系上位墓が、各群における副葬品数最多墓となっている。K群は47号墓が土器系上位墓であるが、他の4基はいずれも工具系で、O群に近い様相であると考えられる。L群は副葬品が少ないため、いずれの系かは不明である。つまり、後期墓において土器系階層性と工具系階層性とが、墓群によって分けられている可能性があると考えられる。

以上により、各墓群内における副葬品数最多墓は、前期墓では工具系上位墓であり、後期墓においては、工具系か土器系かは墓群によって異なっていると考える。中期墓は両期の中間的様相としてとらえられると考える。また、後期墓において、土器系・工具系の階層性が、墓群単位で結び付いている可能性があると考えられる。

(4) 小結

本章での分析結果は以下のようにまとめられる。

- (1) 階層性の不連続性は時期が下るにつれ増大し、階層性の程度が高まる。
- (2) 階層化要素間の相関は時期が下るにつれ高まり、階層性の程度が高まる。
- ① ただし、複数系列の階層性が共存している可能性が高い。

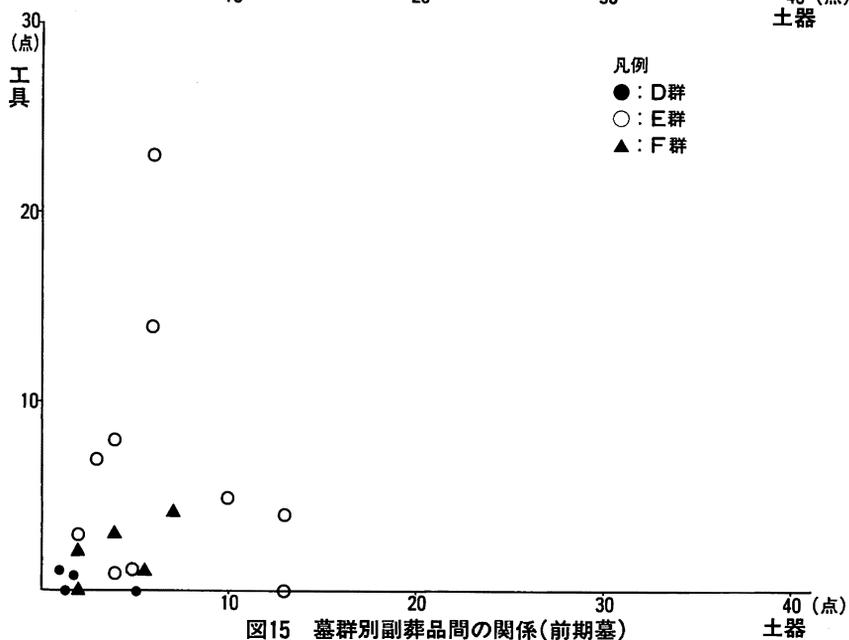
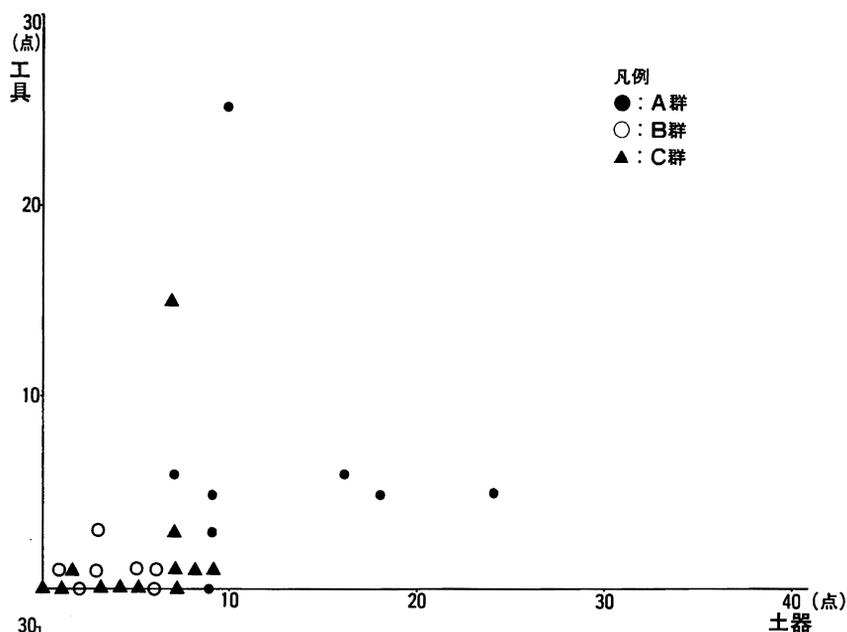


図15 墓群別副葬品間の関係(前期墓)

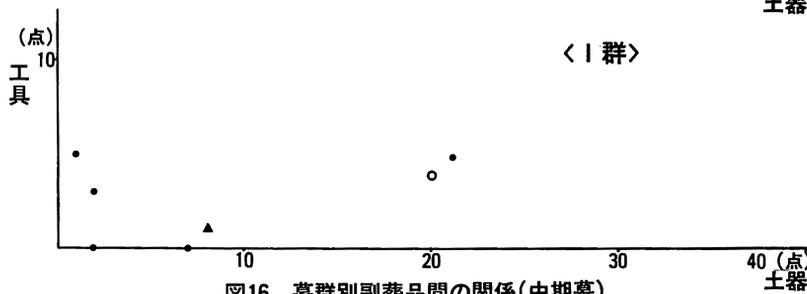
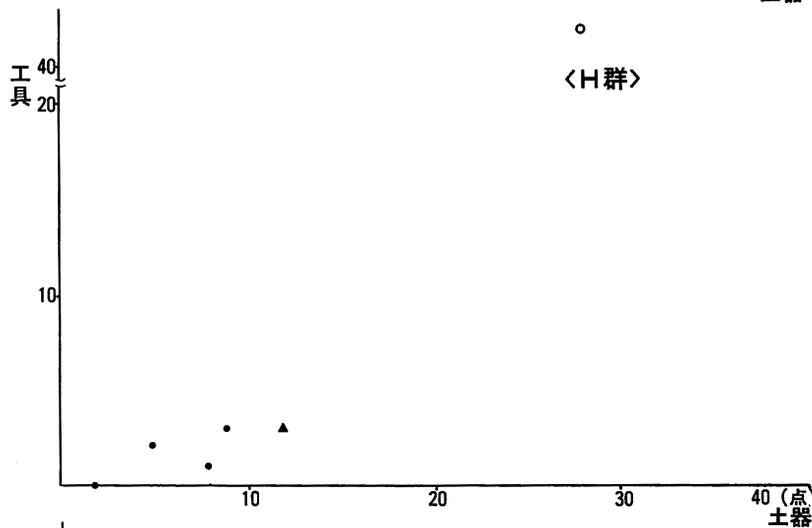
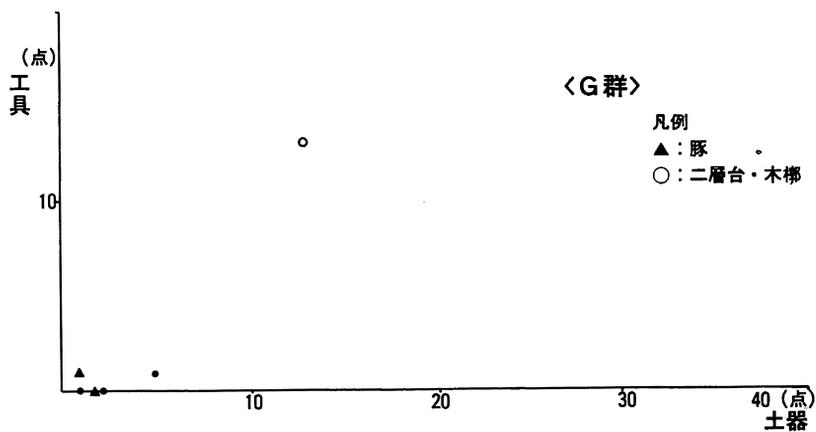


図16 墓群別副葬品間の関係(中期墓)

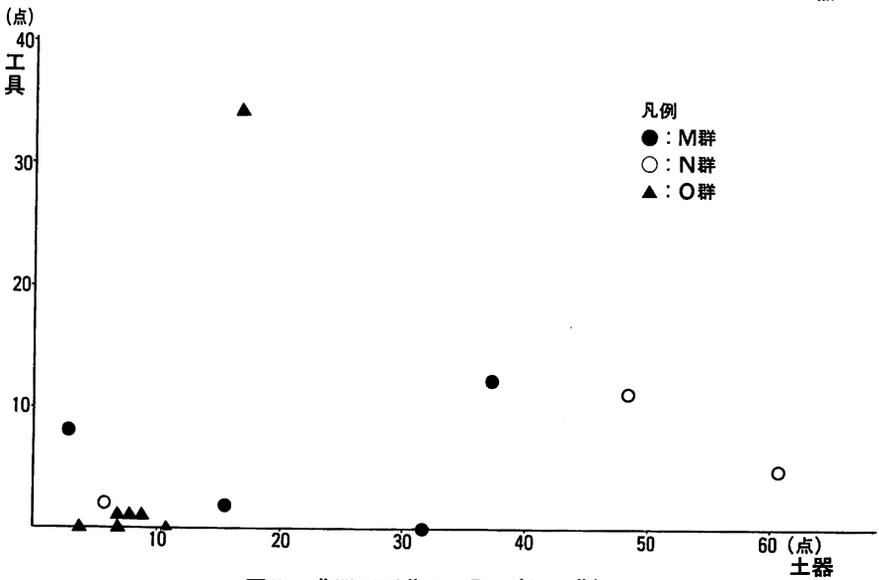
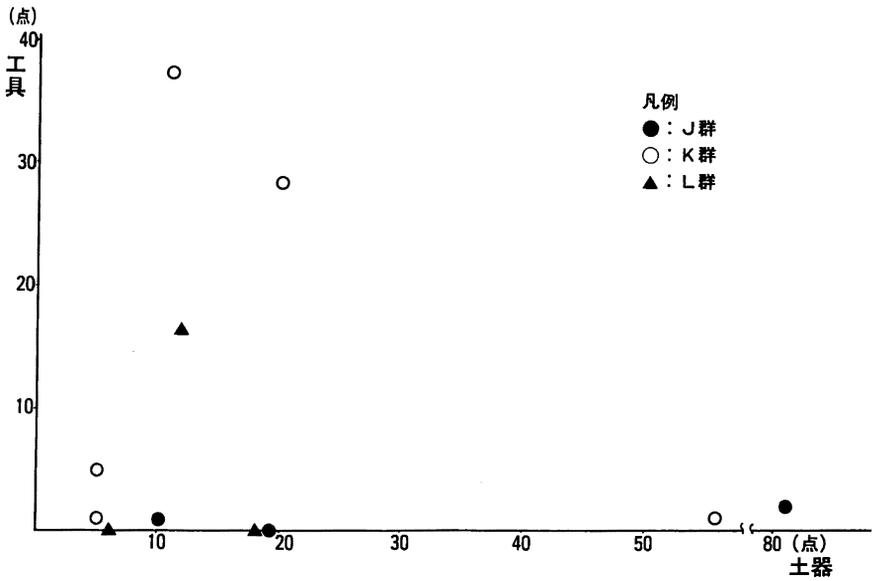


図17 墓群別副葬品の関係(後期墓)

- ② また、複数系列間の関係は他の階層化要素との関係より対等ではなく、差異がある。
- (3) 墓群との関係では、墓群単位の階層性から墓群内部での階層性が顕著になる。
- ① 各墓群の副葬品数最多墓は、前期墓では工具系上位墓が多いが、後期墓になると土器系上位墓の墓群も出現する。
- ② 後期墓では複数系列の階層性と墓群が相関する可能性が高い。

5 検 討

本章では、前章における分析結果を基にして、いくつかの仮定をもうけて、大汶口遺跡の墓地における階層性について検討する。

(1) 検討における仮定

前述したように、筆者は考古学的な「墓制」を、「墓地構成要素間の関係のあり方」と概念規定する。まず、この「墓地構成要素間の関係のあり方」を被葬者に対する社会的評価の表現と仮定する(渡辺 1989b)。いうまでもなく、死者を葬るのは生者であり、死者の取り扱い方は生者の評価・判断によって決定されると考える。その評価・判断を、我々は、「表現要素」として、また、要素間の関係のあり方として認識すると考える。そして、このような要素および要素間の関係のあり方が多出し、数量的な傾向性を示す場合、その背後に存在する生者による評価・判断もまた、決して恣意的・偶然的なものではなく、社会的に認定された規範として成立していたと仮定する(Shennan 1975)。つまり、「墓制」は、社会構造そのものを反映したものではなく、社会的に認定された規範として価値観を表現していると仮定する。⁽¹⁹⁾

以上の仮定にたって、墓地における階層性の背後に、「階層的規範」が存在していたと仮定する。そして、階層性の相関が高い場合、それらの階層性を規定する階層的規範が同じか、少なくともきわめて近いものであると仮定する。逆に相関が低い場合は、個々の階層化要素の階層性を規定する階層的規範は相互に独立している可能性が高いと考える。

前章における「複数系列の階層性の共存」とは、全階層化要素を規定する階層的規範が成立しておらず、各階層化要素が、いくつかの異なる階層的規範によって規定されている状態をさす。また、階層化要素間の相関関係における「階層性の程度が高い」とは、ひとつの階層的規範による階層性により近く、逆の場合はより多くの複数系列の階層的規範が共存しているという状態に近いと考えるのである。

また、階層化要素における連続性と不連続性については、階層的規範の強弱と仮定する。つまり、不連続性が大きい場合の方が、階層的規範も強力であると仮定する。

(2) 大汶口遺跡における階層性

前章で検討したように、大汶口遺跡においては、時期が下るごとに階層化要素内の不連続性が増大し、階層化要素間の相関が高くなると考えた。これを前節での仮定に基づき、階層的規範がより強力になり、なおかつ、より一系列的な階層的規範へと集約していく過程と考える。

しかし、その一方で副葬品の数量的階層性に端的にあらわされるような、複数系列の階層性が共存している状況があると考えられる。つまり、階層的規範は完全に一系列化されておらず、複数系列の階層的規範が共存していると評価する。

では、この複数系列の階層的規範のなかで、各系列の違いを生み出す、別の規範はなにか。この点については、後期墓において、土器系・工具系階層性それぞれに相関する可能性のある要素として墓群を指摘した。つまり、墓群を形成する原理が階層的規範をわける規範となっていたと考えることができる。墓群を形成する原理に関しては、血縁関係や婚姻関係を想定する、さまざまな仮説が成立可能ではあるが、近年、形質人類学の進展にともない、出土人骨の遺伝的形質による親族関係の推定が可能になってきている（田中・土肥 1986・1988）。しかし、本遺跡における遺伝的形質に関する情報はなく、また仮説を立てるために必要な性別・年齢に関する情報が少ないため、ここでは仮説の提出は控える。いずれにしろ、本遺跡における複数系列の階層性を形成させる規範については、資料的制約もあり、その存在の可能性の指摘にとどめておきたい。

ところで、土器系階層性と工具系階層性という複数系列の階層性は、副葬品の数量的階層性のみではなく、他の階層化要素における階層性と相関することを前章において示した。とくに、後期墓における墓坑の質的階層性と土器系階層性との相関、および工具系との排他的関係が、本遺跡における複数系列の階層性を特徴づけていると考える。

前述の仮定に基づき、上記の状況は、土器系階層性における階層的規範が、工具系階層性のそれより、より一系列的であることを示すと考える。つまり、階層的規範の一系列化は本遺跡後期墓では、土器系階層性においてより顕著であると考えられる。また、各墓群における副葬品数最多墓が、工具系上位墓のみの前期墓から、墓群によって、土器系のもものと工具系のもものがある後期墓へと時間的に変化することも、土器系階層性が優越しはじめたと考え、上記の状況を支持するものと考えられる。

大汶口遺跡における階層性については、以下のようにまとめることができる。

- (1) 本遺跡において、時間的変化の中で、階層的規範の強化・一系列化が進行している。
- (2) しかし、本遺跡においては、複数系列の階層的規範が共存しており、完全な一系列化は成し遂げられていない。
- (3) 複数系列の階層的規範を成立させる分割規範は不明である。
- (4) 複数系列の階層的規範間において、一系列化の進行には差がある。本遺跡の場合、土器系階層性において、一系列化が顕著である。

結 語

以上、階層性間の相関関係および階層性内部の連続性・不連続性というふたつの基準によって、大汶口遺跡を素材として、墓地における階層性を検討してきた。その結果については前章においてまとめてあるので、ここでは今後の見通しと課題についてまとめて結語に代えたい。

大汶口遺跡において筆者が認めた「複数系列の階層性」はその後どのように展開するのか。筆者は、かつて検討した山東竜山文化の呈子遺跡におけるよう

な、工具をほとんど副葬せず、土器および二層台・木槨による序列性をもった階層性が、山東竜山文化において形成されると考えている。つまり、山東竜山文化では、少なくとも土器と工具という形での複数系列の階層性は消滅するのではないかという予想を、現在持っている。本遺跡における土器系階層性と工具系階層性との間における、他の階層化要素との相関の差異は山東竜山文化における工具副葬の激減・土器副葬の優越の濫觴であると考えている。

また、近年、大汶口文化はもとより、山東竜山文化におけるまとまった墓地資料も増加しているが（例えば山東大学歴史系考古専門教研室 1990・中国社会科学院考古研究所 1988）、そのなかでもとくに臨朐県西朱封遺跡における「大墓」は、きわめて注目すべき資料である（山東省文物考古研究所・臨朐県文物保管所 1989・中国社会科学院考古研究所山東工作隊 1990）。このような「大墓」の成立を、大汶口遺跡に見られた階層性の強化・一系列化という傾向のなかで位置づけていく必要がある。

ただし、再三述べるように、墓制の変化とは社会的規範としての価値観の変化を表すものであって、社会の変化を検討するためには、文化的コンテクストの全体的な検討が必要である。

最後に、本稿で用いた階層性把握の方法におけるふたつの基準—連続性・不連続性、相関の程度—は、ともに統計学的手法になじみやすいものである。それゆえ、統計学的手法を用いて、筆者の主張する階層性の高まりが、統計学的に有意なものかどうかを検討する必要があると考えている。

了

1991年10月31日 北京にて

謝辞

本稿を草するにあたっては、故岡崎敬先生をはじめとして、横山浩一・西谷正・岡村秀典・田中良之各先生方のご指導・ご教示を賜りました。また、本稿は筆者が文部省在外研究員として中国北京大学滞在中に執筆したものであり、その間、北京大学考古系の嚴文明先生・趙輝先生のご指導・ご教示をいただきました。ここに謹んでお礼もうしあげます。また、多くの方々からご教示・

ご助言をいただきました。文末にご芳名を記して感謝の意を表します。

伊藤和彦・小沢正人・久保寿一郎・後藤雅彦・崔大勇・蔡鳳書・邵望平・高橋
学而・田崎博之・杜在忠・中園聡・溝口孝司・宮井善朗・宮本一夫・横田禎昭・
劉茂源 (五十音順・敬称略)

注

- (1) 山東地域に限っただけでも、高・邵 1984、王錫平 1986、魏 1974、黎 1981
などを初めとして数多い。
- (2) 墓地資料における変異と社会構造との関係については、Ucko 1969、Binford
1971、Parker-Pearson 1982、O'Shea 1984など参照のこと。
中国における、墓地資料と社会構造との関係についての評価は、研究者によっ
て微妙に違うが、社会意識の反映として墓制をとらえ、その社会意識を社会構
造が規定するという考えを基にして、社会構造を復元するための有効な資料で
あるという認識が一般的である。(例えば、高広仁 1989・呉 1987・巖 1989
など)。ただし、近年、墓地資料からの単純な社会構造の復元、とくに母系制社
会か父系制社会かという議論に対して、批判も出ている(王寧生 1987・童
1989)。
- (3) このほか、大・中・小型墓がそれぞれ占める比率によって、階層性の程度の
高低を示す方法がある(例えば高焯他 1983)が、この方法は、大・中・小型
墓に分類されて初めて可能な方法であり、連続的な階層の変異においては用い
ることはできない。
- (4) 筆者はかつて検討した山東竜山文化の呈子遺跡において、明確な序列性を
持った階層性を認める(渡辺 1987)。また、十分資料は公表されていないが、
山西省襄汾県陶寺遺跡には、このような階層性が認められるという(高焯他
1983)。
- (5) 階層化要素と非階層化要素との区別は、必ずしも絶対的なものではない。例
えば、各墓の占地に階層的な差異を求めることも可能ではある。
- (6) 変異間の距離(変異幅)と、変異の連続性・不連続性は厳密には異なる。例

えば、副葬品を1点もつ墓と副葬品を持たない墓との不連続性は、その墓地全体の副葬品の数量によって左右される。両者の違いを抽出するために、今回用いた方法にはまだ検討の余地が残っていることを認めざるを得ない。

- (7) 抜歯や頭骨変形は「人為的」加工と呼ぶように、本来は生者によって表現された要素である。しかし本稿でいう「表現要素」とは、葬送行為にともなうものに限定するので、葬送行為以前になされた人為的加工は、葬送行為に直接関係ないものと考え、非表現要素に含める。
- (8) 本資料における分析はないが、近年、人骨の¹³C分析や古病理研究に対する関心が高まっており(蔡・仇 1984・宋 1990)、今後の研究の進展が期待される。
- (9) 報告によると、仰臥伸展葬116基・側臥葬12基・俯身葬と屈肢葬各1基・空墓5基とされるが、計135基になり、数が合わない。本稿では、報告書末尾の「表13 墓葬登記表」をもとに算出した。
- (10) 報告では、海で遭難した人の塚を作る海浜地域の民俗例と同様なものであるとしている。また、戦死者の墓と考える研究者もいる(劉 1981)。
- (11) 「木槨」と呼ぶべきか、「木棺」と呼ぶべきかは難しいが、本稿では報告の名称にしたがう。
- (12) 筆者はかつてこれらの要素を「優位要素」と呼んだが(渡辺 1987)、階層性の連続性・不連続性を考えるうえで、適当な名称とはいえないので、本稿では用いない。
- (13) 土器製作における「丁寧さ」という観点は、中園聡氏の示唆による。
- (14) 前期墓と中期墓の墓坑規模それぞれの変異幅は大きな差はない。それゆえ、中期墓においてグルーピングが可能なのは、資料数が少ないことによる可能性もある。ただし、後期墓において、変異幅は増大しているので、少なくとも不連続性の増大という傾向は存在すると考える。
- (15) 77号墓からも象牙製の彫筒が出土しているが、この墓は攪乱が激しいため、その副葬品の少なさ(13点)は、本来のものではない可能性が高いと考える。
- (16) このことは二層台の築造が、本来副葬土器を置く空間として形成された可能性を暗示すると考える。それゆえ、土器系階層性との相関は副葬土器の空間の

確保という機能的結びつきである可能性は否定できない。しかし、前期墓においてほぼ同数の土器を持ちながら、二層台を作る墓と作らない墓とがあることから、土器数が一方的に二層台の有無を決定してはいないと考え、階層化要素として扱う。

- (17) N群は、墓坑規模Ⅲ群は伴わないが、墓坑規模不明の127号墓が、Ⅲ群に属すると考える。
- (18) 横田 1983は、トルコ石・玉製品が各墓群に見られるようになることを、後期墓における豚副葬の減少と関係づけ、優位性の象徴の変化を考えている。
- (19) もちろん社会的規範が、社会の一部である以上、社会からまったく乖離した仮構のものとするわけではない。ただし、造墓行為が葬送儀礼の一環として行われることを考えれば、そこで示される表現は一種の儀礼的表現型であると考えることができる。それゆえ、そこには「強調」や「隠蔽」といった「歪み」が介在する可能性が高いと考える (Hodder 1982・Parker-Pearson 1982)。

引用文献 (アルファベット順)

- Biniord, L. R. 1971 Mortuary practice : their study and potential. in Brown, J. A(ed.) *Approaches to social dimensions of mortuary practices.Society for American Archaeology Memoir No.25*
- 蔡蓮珍・仇士華 1984 碳十三測定和古代食譜研究. 考古1884-10
- 童恩正 1989 摩尔根的模式与中国的原始社会史研究. 文化人類学. 上海人民出版社
- 高広仁 1989 大汶口文化的葬俗. 中国原始文化論集. 文物出版社
- 高広仁・邵望平 1984 中華文明発祥地之一—海岱歴史文化区. 史前研究1984-1
- 高煒・高天麟・張海 1983 关于陶寺基地的幾個問題. 考古1983-6
- 高煒 1989 竜山時代の礼制. 慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集. 文物出版社
- Hodder, I. 1982 *Symbols in action*. Cambridge University Press.
- 黎家芳 1981 從大汶口文化葬俗演變看其社会性質. 大汶口文化討論文集. 齊魯書社

- 劉敦愿 1981 山東寧陽堡頭大汶口墓地和有虞氏關係問題的探索。大汶口文化討論文集。齊魯書社
- O' Shea, J. 1984 *Mortuary Variability*. Academic Press
- Parker-Pearson, M. 1982 Mortuary practice, society and ideology: an ethnoarchaeological study. In I. Hodder (ed.) *Symbolic and structural archaeology*. Cambridge University Press 1982
- 山東大學歷史系考古專業教研室 1990 泗水尹家城。文物出版社
- 山東省博物館 1980 談談大汶口文化。文物集刊 1
- 山東省文物管理處·濟南市博物館 1974 大汶口。文物出版社
- 山東省文物考古研究所·臨朐縣文物保管所 1989 臨朐縣西朱封龍山文化重櫛墓的清理。海岱考古 1
- 邵望平 1989 「禹貢」“九州”的考古學研究。考古學文化論集 2。文物出版社
- Shennan, S. 1975 The social organization at Branc. *Antiquity* 49
- 宗鎮豪 1990 從社會性意義探討仰韶時期居民的疾病和生死。考古與文物 1990-5
- 田中良之·土肥直美 1986 古墳被葬者の親戚關係について。日本考古學協會第52回總會研究發表要旨
- 1988 二列埋葬墓の婚後居住規定。日本民族·文化の生成。六興出版
- Ucko, P. J. 1969 Ethnography and archaeological interpretation of funerary remains. *World Archaeology* 1-2
- 王寧生 1987 仰韶文化葬俗和社會組織的研究。文物 1987-4
- 王錫平 1986 試論大汶口墓葬所反映的社會性質。山東史前文化論文集。齊魯書社
- 渡辺芳郎 1987 山東龍山文化墓制考—呈子遺跡の検討—。東アジアの考古と歴史。同朋舎
- 1989a 中國新石器時代タカラガイ考。橫山浩一先生退官記念論文集 I 生産と流通の考古學。橫山浩一先生退官記念事業會
- 1989b 劉林遺跡墓制考。史淵 126
- 魏勤 1975 從大汶口文化墓葬看私有制的起源。考古 1975-5
- 吳汝祚 1987 試論大汶口文化的三處墓地。考古學報 1987-3

- 1990 大汶口文化的墓葬。考古学報1990-1
- 嚴文明 1980 論青蓮崗文化和大汶口文化的關係。文物集刊1
- 1989 半坡類型的埋葬制度和社会制度。仰韶文化研究。文物出版社
- 顏閻 1972 大汶口新石器時代人骨的研究報告。考古学報1972-1
- 楊子範 1959 山東寧陽縣堡頭遺址清理簡報。文物1959-10
- 横田禎昭 1983 トルコ石交易からみた中国新石器時代晩期の様相。中国古代の東西交流。雄山閣
- 中国社会科学院考古研究所 1988 膠県三里河。文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所山東工作隊 1990 山東臨朐朱封竜山文化墓葬。考古1990-7